

# 白 樺 派 研 究 (1)

## — 漱 石 へ の 接 近 —

永 田 哲 夫

(文理学部国語学国文学研究室)

### A STUDY ON SIRAKABA-HA (1)

Tetuo NAGATA

#### 1

夏目漱石と「白樺」派の交渉を、「白樺」創刊号に発表した武者小路実篤の「それから」評(原題『それから』に就て)に求めるのは今日定説となっている<sup>(1)</sup>。ここではその前駆的意味で、武者小路実篤、志賀直哉の日記、書簡を中心に漱石との交渉過程を考えることにする。

武者小路実篤の日記中、漱石の創作について述べた最初のもは、明治三十九年四月十七日がある。そこには

八時頃齊藤君ホトトギスの今月のを持って来てくれた。「坊ちゃん」を読んだ。痛快。

(「彼の青年時代」)

と書いてある。

周知の通り、漱石の創作活動は、明治三十八年一月、俳誌「ホトトギス」に発表した「吾輩は猫である」をもって始められたと考えられる。当時、漱石は第一高等学校で英語の授業を持つかわら、東京帝国大学で英文学の講義を担当する教師が本職であった。小宮豊隆氏のいわれるように「当時の漱石にとって、創作は、あくまで余技であり、道楽であった」(「漱石の芸術」)としても、「吾輩は猫である」は読者の好評を博した<sup>(2)</sup>。武者小路がこの作品を読んで、「『我輩は猫である』(今月のホトトギス)を読んだ。やっぱり面白い。奇抜で警句に富んでるからであろう。筋はごく簡単なもの。」と日記にしるした(明治三十九年四月十八日)のは、文壇の圏外にあった漱石の奇抜で、新鮮で、「全く趣きを異にした」(虚子「漱石と私」)作品が「ホトトギス」誌上を飾っていた時期のことである。漱石の出現は文壇的には驚異であった<sup>(3)</sup>。そして、この作品が、いわゆる文壇馴れした特定層の読者でなく、広範な人々に多大の興味と関心を抱かせ、これが契機で原稿の依頼が激増したことは「吾輩は猫である」上篇の自序や<sup>(4)</sup>、書簡<sup>(5)</sup>によって明白な通りである。

漱石は藤村の「破戒」に深い理解を示し、その真摯な創作態度を賞賛したが<sup>(6)</sup>、藤村、花袋など明治四十年代文壇の主潮流であった自然主義には同調しなかった。反対に「有体に申候へば今の所謂自然派(自然派をかたち作る人物)が嫌に候<sup>(7)</sup>」と嫌悪の情を抱いていたのである。一方、ほぼ同時期のネオ浪漫派の活動に対しても、鈴木三重吉宛書簡等<sup>(8)</sup>にみられる批判と是正を与えているのである。自然主義にも属さず、耽美主義にも組せず、「小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に対する義務であり且つ天と親に対する義務だと思ひます。(中略)昔はコンナ事を考へた時期があります。正しい人が汚名をきて罪に処せられる程悲惨な事はあるまいと。今の考は全く別であります。どうかそんな人になって見たい。世界総体を相手にしてハリツケにでもなってハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで軽べつして死んで見たい。」と高浜清に書き送ったのは、三十九年七月三日のことであった。「坊ちゃん」の執筆はまさにこのような時期だったのである。

諷刺、諧謔、人生批評の底にユーモアをたたえた漱石の作風は、白樺派同人、ことに武者小路や志賀直哉の共感を得た。武者小路の「或る男」八十七章に「夏目さんの坊ちゃんもその時分出たのかと思ふ。志賀がすっかり感心して、皆にすゝめて歩いてゐた。彼も借りて読んで随分笑って痛快にも思ひ、その自由さにおどろいた。」と書いてある。といって、この時期の彼等は漱石一辺倒であったのではない。日本文学に対する関心より、はるかに外国文学への知的欲求が高かった。ちなみに三十九年代における武者小路の文学の対象は周知の通りロシア文学であり、なかんずく「トルストイ一点張り」（「或る男」八十七章）であった。例えば、三十九年三月二十日から五月末日までの読書傾向を「彼の青年時代」からみてみると、外国文学（思想その他を含む）では、トルストイの作品を筆頭にリビングストンの伝記、ゴルキーの短篇、ハウプトマン、ビョルソン、グリルパルツェル、ディッケンズ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、ゾラ等の外国の作家、作品が頻出している。これに比し、日本のものでは「坊ちゃん」「吾輩は猫である」「天の網島」「多情多恨」「破戒」がしるされているにすぎない。

志賀直哉については、三十九年の日記を欠くため、翌四十年一月より三月末までの日記から拾ってみると、外国関係では、ロダン、ツルゲーネフ、ゴルキー、イブセン、モーパッサン、ゾラ、ハーゲン、シェークスピア等の作品がある。日本のものでは、小山内薫の「病友」竹風の「島の聖」、漱石「野分」、坊ちゃん、小栗風葉「別れ際」、木下尚江「懺悔録」、泉鏡花「縁結び」「式部小路」「みだれ焼」、大塚楠緒子「あきらめ」、島村抱月訳「其女」等があげられる。

上述の如き読書傾向の中で武者小路は「日本の作家で独歩と夏目さんを愛し」「殊に夏目さんのものには、僕にはまねのできないところがあると思うが、正直に、自分の書きたいものを、心をこめてかけばいいのだと思った」と漱石への接近を語り、「思い出の人々」一方、直哉は、「夏目さんのものは晩年のものを除いては、総て出た時に読んでそれぞれに面白く感じた」（「読書」）と書きとどめ、初期直哉の形成に漱石の影響を見出すことが出来るのである。

## 2

漱石の作品「それから」は、明治四十二年六月二十七日から十月十四日まで、「東京朝日」および「大阪朝日」に百十回（全十七章）にわたって連載され、翌四十三年一月に春陽堂から刊行された。「それから」に対する白樺派作家達の反応は、新聞連載中については、

目白学習院の寄宿寮で、朝日新聞連載の漱石の「それから」を愛読す（明治四十二年）  
という長与善郎の年譜にみられ、また、

一月一七日 月（明治四十三年、これは単行本と推測される）

終日家にゐた「それから」を読む

一月一九日 水（同上）

午前「それから」読了

としるした志賀日記などにみることが出来る。が、なんといっても、「夏目さんを日本で一番尊敬してゐた」と自認する武者小路が、「多くの批評家が夏目さんの悪口を云つてゐるのに腹を立てゝゐたので」（「或る男」百二十四章）書いて発表した「『それから』に就て」（「白樺」創刊号）は同時代評として最も有名なものであり、かつ漱石への接近の端緒となったものであることは今さら言うまでもないことである。

「『それから』の著者夏目漱石氏は真の意味に於ては自分の先生のやうな方である、さうして今の日本の文壇に於て最も大なる人として私かに自分は尊敬してゐる」

「『それから』に就て」の冒頭であるが、武者小路の漱石に対する敬意が十分汲みとれる。と同時に、「それから」に対する批評態度には、漱石に迎合しない自己主張の立場が明確である。武者

小路はこの批評で、「それから」に顕われている人物の中で、自然の命に従って行動している巨人はいないとし、反対に社会に服従して平気である人はかなりいると指摘する。そして「終りに自分は漱石氏は何時までも今のまゝに、社会に対して絶望的な考を持ってゐられるか、或は社会と人間の自然性の間にある調和を見出されるかを見たいと思ふ。自分は後者になられるだらうと思つてゐる。さうしてその時は自然を社会に調和させようとされず、社会を自然に調和させようとされるだらうと思ふ。」と結論している。既存の社会秩序に逼塞するか。自然の命に従って天意に生きるか。武者小路は迷うことなく後者を選んだのである。自我の拡大発展が普遍的な人類の意志に叶うとする強烈な自己肯定と信仰に支えられて。

武者小路の真率で忌憚のない批評に対して漱石は

拜啓白樺一号御恵送にあづかり拜受。巻頭の「それから」評未だ熟読不致候へども直ちに一寸眼を通し候。拙作に対しあれ程の御注意を御払ひ被下候のみならず、多大の頁を御割愛被下候事感佩の至に候。深く御好意を謝し申候。(以下略)

と三月三十日に、はがきを送っている。礼節を重んじる漱石にとっては、きわめて自然な礼状であったろうが、「白樺」は「恐らくよんでもらへまい。返事はなほもらへまい」(「或る男」百二十五章)と思つていた武者小路は、意外な返礼に「をどり上つてよろこび」早速、志賀直哉に連絡したのである<sup>(9)</sup>。

このようにして、文壇史的に言えば、武者小路のこの批評が「白樺」一派を漱石に接近させ、また「朝日新聞」はじめ文壇に登場させる契機となつたのである。それは同時に、青年作家武者小路に「ある自覚を与へた」のである。「ある自覚」とは何か。結論を言えば、個人的には<作家武者小路実篤>の自己確立であり、「白樺」グループにとっては、彼等の創作活動(「白樺」は新しい運動を起す為に出たものではなかつた。たゞかいたものを発表したいのが目的だつた——「或る男」百二十五章)が、ともかく新しい文学創造への意欲を高め得たということである<sup>(10)</sup>。武者小路実篤は、これ以後、漱石からの依頼で、「朝日新聞」文芸欄に二三度感想を書いて発表した。

漱石と武者小路の往復書簡を中心に両者の交渉の経過を調べてみる。

明治四十三年四月六日 武者小路実篤へ

拜啓「代助と良平」頂戴難有候都合次第掲載可致候間しばらく御猶予願上候。右御礼迄 草々  
注 「代助と良平」明治四十三年四月十一日朝日新聞掲載

明治四十三年四月十一日 武者小路実篤へ

御端書拜見致候あの文句を玉稿中に挿入する事はどこかツギの出来る様な気がして、どうも旨く行きませんから已めました。右あしからず。御旅行の由充分の御保護を祈る

明治四十三年五月二日 武者小路実篤へ

玉稿たしかに入手致しました。都合つき次第掲載致します。毎度御迷惑をかけて済みません此後も時々願ひます。白樺も慥かに頂戴。右御礼迄 草々

注 「賞讃者と批評家と創作家に」明治四十三年五月十五日、朝日新聞掲載

明治四十三年六月五日 武者小路実篤へ

拜啓尊稿正に落掌致し候。あれで宜しいと思ひます。たゞ全局に涉つての議論になると、あゝばかりも行くまいと思ひます。今少し原稿がたまってゐますから少し後れますから其積に願ひます。少し位時日が経過しても腐る種ではないから構はないでせう。毎々難有存じます。

注 「作家に対する要求」明治四十三年六月十三日、朝日新聞掲載

志賀直哉が漱石の作品を読み始めたのは「愛読書回顧」によれば学習院の高等科のころである。「作中の人物や、漱石自身の人間、倫理感といふものに」好感を抱いたからである。明治三十九年、東京帝国大学文科大学英文学科に入学した志賀直哉は、ここで漱石の講義を聞くことになった。いま、その講義内容を確認し難いが、漱石年譜によると（『夏目漱石全集』第十一巻、荒正人編、創芸社昭和三十年三月）明治三十八年の項に「九月、東大にて『十八世紀英文学』開講。序言は六月中に講じた。一週三時間で、退職する四十年三月まで続講。後に『文学評論』として出版したもの。」と記述されている。直哉の聴講した講義はあるいはこれだったかと思われる。漱石自身は自分の講義は難解で不評判だったと言っているが、「志賀や正親町や木下は夏目さんの講義に随分感心し、又よろこんでいた。殊に志賀はすっかり夏目さんずきになって、よく夏目さんの云った言葉を彼に話した。」（『或る男』九十九章）と武者小路はしるしている。すでにこの頃には小説家志望を決定した志賀直哉である。青年期の直哉に影響を与えた作家として、モーパッサン、テューホフが、日本の作家では、紅葉、鏡花、独歩、二葉亭などがあげられている。なかんずく漱石の人間の魅力が大であった。

学習院の高等科にゐる頃から、作家をもって身を立てるつもりだったが、其頃読んだものでは、漱石に好感を持った。作中の人物や、漱石自身の人間、倫理感といふやうなものに、好意を感じたのである。（『中野好夫君にした話』）

同様の趣旨は「愛読書回顧」「私はかう思ふ」などにも書かれている。すなわち、文体や、小説の好みは違っているが、漱石の作家としての道念といったものの影響を一番強く受けているのである。「吾輩は猫である」や「坊ちゃん」などは繰返して読んだ作品だと直哉は書いている。（『愛読書回顧』）坊ちゃんのまっすぐな気性や、猫の正義のため、人道のためなら、たとえ無駄死をやるまでも進む正義感、直哉の潔癖な気性や非妥協的な気質と通じ合いそうである。直哉の日記に頻出する、快、不快の直截な感情表出も、直観的に事の是非、善悪、好悪を判断し断定を下す性格を物語るものと考えられる。

ところで、「それから」につづいて漱石の「門」は、明治四十三年三月一日から六月十二日まで朝日新聞紙上に連載された。「門」の同時代評、ならびに作品の評価については、たとえば「『門』遠藤祐」（『国文学解釈と鑑賞』——夏目漱石研究図書館——昭和三十三年三月号）に簡潔に紹介されている。漱石の「門」が、「単に自分が鎌倉に参禅に出かけた時の経験を告白するに止まらず、それを頂点として、是まで自分がその為に苦勞して来た人生の道程を描き、宗助の生活を通して、自分のある時期の生活を象徴しよう<sup>(11)</sup>」としたものにしろ、あるいは、対蹠的な評価軸として、「作者の精神の傾斜は、徹底した不安定な日常の人間生活からの逸脱、逃避<sup>(12)</sup>」に求められるにしろ、この作品の世界が、きわめて「寂しくて、暗くて、じめじめした世界<sup>(13)</sup>」である事実には変わりはない。

漱石のこの作品は、いち早く「白樺」の同人達に読まれた。志賀日記には、

明治四十三年六月二十三日 木

「門」を読む。

と書いてある。武者小路の「或る男」百二十七章には

（前略）彼は夏目さんの「門」のことを、一寸いくら夏目さんのものでもよみつづけられな  
いと何かにかいたので、夏目さんから手紙をもらった。それには少し誤解があった。彼はいく  
ら夏目さんのものでも、と云ふ意味で夏目さんに対する尊敬を示してあった。しかし悪い例に  
とられた夏目さんは気にして抗議の手紙をよこした。

と書きつけてあり、ついで、「『門』のじめじめしてゐるのを彼がよろこばなかった」、「『門』

は自然派の人達がよろこんだ」が、「若かった彼には不快だったのかも知れない」と感想をのべている。「自然主義の淤泥」(「あの頃の自分の事」芥川龍之介)と指摘された暗鬱な宿命論と、単調きわまる平面描写に敢然として抵抗し、「個性の尊重と主観の跳梁」(「秋風一夕話」佐藤春夫)の実現を指向する武者小路にとっては、漱石の作品は、余りに暗く、漱石の人生観は閉鎖されたそれと映ったのであろう。「門」の発表された明治四十三年は、「白樺」創刊の年である。自我の拡充発展、自己の生の充実を人生の第一義と考える武者小路は、自己の領土を蹂躪する何物をも拒絶し、また何物もの犠牲になることを欲しないと宣言しているのである<sup>(14)</sup>。さらに、この年には「お目出たき人」が発表されているわけだが、作中の主人公が挫折に屈せず、失恋の痛手をかえて自己の精神の鼓舞に転換する理想主義と、明朗な楽天主義は、彼が敬慕する漱石の世界には求むすべもなき異質な世界であった。僚友、直哉も同年四月には「白樺」創刊号に「網走まで」を発表、その後、「剃刀」「母の死と新しい母」「大津順吉」「正義派」等の初期代表作を発表し、作家としての自立を果たしたのである。大正二年一月、最初の短篇集「留女」を洛陽堂から刊行した。小宮豊隆宛はがきに

夏目先生が「留女」をほめて下さった事を聴きましてありがたく思ひました。

と書いたのは大正二年四月十五日である<sup>(15)</sup>。同月二十八日の小宮宛はがきでは「夏目先生の御病氣は其后如何ですか、貴君まで御伺ひします」と見舞っている。

そして、この年の暮、直哉は武者小路を介して漱石から「朝日新聞」連載小説の依頼を受けた。「心」の後を引きつぐ作品となる筈であった。直哉は「夏目さんには敬意を持ってゐたし、自分の仕事を認めて呉れた事ではあり、なるべく豆腐のぶっ切れにならぬやう書くつもり<sup>(16)</sup>」で執筆をはじめたが、長篇は思うように進捗せず、大正三年七月上京、漱石を牛込に訪ね、執筆を謝絶した。漱石の再度のすすめがあったが、ついに翌日、断わりの手紙を出した。漱石は七月十三日付で、

御書拝見どうしても書けな〔い〕との仰せ残念ですが已を得ない事と思ひます。社の方へはさう云ってやりました、あとは極りませんが何うなるでせう御心配には及びません、他〔日〕あなたの得意なものが出来たら其代り外へやらずに此方へ下さい先は右迄 匆々

と書き送っている。

志賀が埋めるべきであった連載小説の空地は「白樺」同人の武者小路(「死」)、里見淳(「母と子」)などによって埋められた。志賀の「時任謙作」は上述の経過をたどってついに出来なかった。漱石の温情は、かえて志賀の筆を渋滞させ、「以後三年間創作の筆を断つ<sup>(16)</sup>」という空白期を迎えた末、義理固い漱石への報礼は彼の死後、大正六年、「佐々木の場合」のデディケートの形をとって果たされた。

漱石の直接の門下生でこそなかったが、武者小路実篤、志賀直哉の漱石に対する敬愛の情はきわめて厚いものであった。それはへつらいでも盲従でもない。それぞれが自己の立場と自己の信念を堅固しつつ、他者のそれをも尊重しようとする強い自己本位であり、個人主義である。武者小路のいわゆる個人主義の道徳がこれである。

たしかに夏目さんは日本に生れた文学者の内で最も立派な人だと思ふ。どんな所へ出しても自己をちゃんもってゐた人と思ふ。

自分は自己の過去を顧み、自分を熱愛し、自分を大切にし、自分を尊敬して来たといふ自信を持つ事が出来る。

前者は、武者小路の感想<sup>(18)</sup>であり、後者は志賀直哉が「青臭帖」にしるした一節である。志賀、武者小路を始めとして、漱石に接した白樺派の人々は、第一に漱石の人格に触れ得た喜びを語り、潔癖な倫理的主体確立の師表であったことを異口同音にのべているのである。白樺派と漱石の関係について、高田瑞穂氏は、「白樺派の人々は、漱石の『自己本位』を受けつつ、ある意味で、明らかに漱石を越えた地点から出発した。漱石の心を学びつつ、その暗部、その苦悩をすっぱりと切

りすて、漱石の苦悩を無雑作に自分の喜びに変えた武者小路の場合が、その典型であった<sup>(19)</sup>。」と述べておられるが、私も同感である。白樺派の人々の漱石への接近は、漱石の精神の継承と同時に、「自己本位」を基盤精神とする「白樺」文学の創造という課題を各自が背負ったことになる..それは、漱石文学を受容しつつ、それとは異質な文学の創造に彼等の青春をかけたとも考えられるのである。

## 〔注〕

1. 井上百合子 「漱石と白樺派」(「明治大正文学研究」第十八号)  
川副 国基 「白樺派と漱石」(「国文学」第四卷第三号)
2. 「吾輩は猫である」上篇自序  
自分が今迄「吾輩は猫である」を草しつつあった際、一面識もない人が時々哲信又は絵端書杯をわざわざ寄せて意外の褒辞を賜はった事がある。自分が書いたものが斯んな見ず知らずの人から同情を受けて居ると云ふ事を発見するのは非常に難有い。  
「吾輩は猫である」中篇自序  
「猫」は余を有名にした第一の作物である。  
高浜 虚子 「漱石と私」(「ホトトギス」大正六年五月六日)  
此一篇が忽ち漱石氏の名を文壇に噴々たらしめた事は世人の記憶に新たなる所である。
3. 小宮 豊隆 「漱石の芸術」
4. 注2参照
5. 明治三十八年十一月十日 鈴木三重吉宛
6. 明治三十九年四月一日 森田米松宛書簡  
明治三十九年四月三日 同上  
明治三十九年四月四日 高浜 潜宛書簡
7. 明治四十三年二月三日 安倍能成宛書簡
8. 明治三十九年十月二十六日
9. 武者小路実篤 「漱石からのハガキ」(「自分の歩いた道」所収 昭和三十一年十一月)  
志賀直哉日記 明治四十三年三月三十一日
10. 長与 善郎 「わが心の遍歴」  
「幸か不幸か、専吉を文学創作に引き入れた幾つかの契機となったものの中で最大な一つは『それから』を読んだということで、そのことが又図らずも、専吉の生涯の一大事件となったというべき武者小路との交遊をとり持つ縁となった」
11. 小宮 豊隆 「漱石の芸術」
12. 江藤 淳 「夏目漱石」
13. 小宮 豊隆 「漱石の芸術」
14. 武者小路実篤 「個人主義の道德」「自分の筆でする仕事」など。
15. 大正二年七月七日の直哉の日記に「夏目さんが時事新報の質問に答へて『留女』をほめた」とある。
16. 志賀 直哉 「続創作余談」
17. 志賀直哉年譜 (「現代日本文学全集第二十巻志賀直哉集」所収、筑摩書房)
18. 「或る男」百七十一章
19. 高田 瑞穂 「漱石と大正文学」(「国文学」第十卷第三号)

(昭和43年9月30日受理)